

# アヴィセンナ『治癒の書』における 宇宙の発出について

小林 剛

## 序

周知の通り、古代ギリシアに端を発する哲学は、ローマ帝国を經由してアラビア世界に伝播した。そこで中心的に研究されたのはアリストテレス哲学であった。特にその『形而上学』第12巻第7、9章で展開されている神論には大変大きな関心が寄せられた。そしてその解釈には、ローマ帝国後期に隆盛した新プラトン主義が応用された。このような特徴を有するアラビア哲学が12世紀後半に西欧に伝わり、西洋最初の体系的で自律的な哲学の出発点となったのである。

本稿では、まず1.で、予備的考察として、アリストテレス『形而上学』第12巻第7、9章における神論を見る。そこで神は「知性認識の知性認識（思惟の思惟）」として捉えられる。次に2.で、アヴィセンナ『治癒の書』「神的学（形而上学）」第9巻第4章を取り上げる。なぜならアヴィセンナは最も代表的なアラビア哲学者であり、彼の『治癒の書』は西欧の哲学に最も影響を与えた彼の代表作だからである。ここでは、アリストテレスが考えた宇宙を構成する神、諸知性認識、天球が、新プラトン主義的な原因結果関係（発出）で捉え直される。最後に3.では、補遺として、アヴェロエス『「形而上学」ラムダ巻大注解』を取り上げる。ここではアヴィセンナの宇宙論が批判的に拡大解釈される。

先行研究として何よりも言及しなければならないのは、H.A. Davidson

の *Alfarabi, Avicenna, and Averroes on Intellect* である<sup>1)</sup>。この書の第4章冒頭にアヴィセンナの宇宙発出論の概要がまとめられている<sup>2)</sup>。しかし本稿では『治癒の書』上記箇所につづいて、そのテキストを丹念に精査し、改めてアヴィセンナの主張を確認することにしたい。

## 1. アリストテレス『形而上学』第12巻第7、9章

アリストテレス『形而上学』第12巻第9章冒頭<sup>3)</sup>の「この知性」は、同じく7章<sup>4)</sup>で神と呼ばれている知性のことであると思われる。この知性は9章<sup>5)</sup>で、「自身を知性認識する」と言われている。それはどのような意味であろうか。自身をも知性認識するという意味であろうか。それとも、自身しか知性認識しないという意味であろうか。

結論的に言えば後者であると思われるが、この問いに答えるためには、なぜこの神である知性が自身を知性認識すると言われているのか、その理由を明らかにすることが必要であると思われる。

### 引用1

だから、〔神である知性は〕もし最善であるならば、自身を知性認識する。そしてこの知性認識は、知性認識の知性認識である<sup>6)</sup>。

この箇所の前半では、神である知性が自身を知性認識する条件として、この知性が最善だということが挙げられている。ということは、この知性が最善であるということ認めるならば、少なくとも、この知性が自身を

---

1) New York/Oxford, Oxford University Press, 1992.

2) pp. 74-83.

3) Aristotle, *Aristotle's Metaphysics*, ed. W.D. Ross, Oxford, Clarendon Press, 1924, Λ, c. 9, 1074b15.

4) *Aristotle's Metaphysics*, c. 7, 1072b25; 28-30.

5) *Aristotle's Metaphysics*, c. 9, 1074b33-34.

6) *Aristotle's Metaphysics*, c. 9, 1074b33-35.

アヴィセンナ『治癒の書』における宇宙の発出について（小林）

知性認識しないことはないことになる。しかしこれではまだ依然として、この知性は自身をも知性認識すると語られているのか、自身しか知性認識しないと語られているのか分からない。

上記の箇所冒頭の「だから」以前の箇所<sup>7)</sup>には、神である知性が自身を知性認識する理由がさらに詳しく語られていると思われる。この箇所の議論はかなり錯綜しているように思われるが、大筋としては、この知性が自身だけを知性認識するということを証明しているように思われる。

## 引用 2

あるいはもし〔神である知性は〕知性認識するが、しかし、このこと〔知性認識〕の中心が別であるならば、これ〔神である知性〕の実体であるものが、〔現実態に在る〕知性認識〔活動〕ではなく、〔知性認識の〕可能態〔知性認識能力〕であるので、〔神である知性の実体は〕最善の実体ではないことになるだろう。実際、価値がそれ〔神である知性の実体〕に属するのは、〔現実態において〕知性認識することによってなのである<sup>8)</sup>。

「知性認識の中心が別」とは一体どういう意味なのか、この言葉だけでは良く分からない。「別」とは何と別なのか。文脈的に言えば、神である知性自身とは別ということだろう。ただしここでこの知性は、知性認識すると語られている。知性認識者である。そうするとこの知性は、知性認識者ではあるが、知性認識の中心ではないということになる。

この言葉の意味は、次に続く部分から理解可能なように思われる。すなわちそこでは、神である知性の実体が、現実態に在る知性認識活動ではなく、知性認識の可能態、すなわち知性認識能力であるとされている。だから、「知性認識の中心」とは、現実態に在る知性認識活動のことであるよ

---

7) *Aristotle's Metaphysics*, c. 9, 1074b15-33.

8) *Aristotle's Metaphysics*, c. 9, 1074b18-21.

うに思われる。

だから、この箇所によれば、神である知性は、現実態に在る知性認識活動でないならば最善ではない。逆に言えば、もしこの知性が最善であるならば、現実態に在る知性認識活動である。もしこの知性自身が現実態に在る知性認識活動であるならば、自身だけを知性認識することになるだろう。なぜなら知性認識活動とは、知性認識者が知性認識対象を知性認識することであるから、この知性自身はその知性認識活動全体であるならば、当然知性認識対象も自身であり、他のものではないはずだからである。

引用 1 の後半で、「この知性認識は、知性認識の知性認識である」と語られた意味はまさにこのことであるように思われる。というのも、属格の「の」は、主体（「が」）を表す場合と対象（「を」）を表す場合とがある。ここの「の」はこの両方を表しているように思われる。すなわち、「知性認識の知性認識」とは、「知性認識が知性認識を知性認識する」という意味であるように思われる。つまり、自身が知性認識活動である知性が、同時にその知性認識の主体でもあり対象でもあることを表しているように思われるのである。

以上の通り、アリストテレス『形而上学』第 12 卷第 9 章によれば、神である知性は自身しか知性認識しない。なぜならこの知性は最善であるがゆえに、現実態に在る知性認識活動、すなわち、知性認識が知性認識を知性認識する活動だからである。同じく 7 章では、このような神である知性の存在が示され、それは最善であるがゆえに、現実態に在る知性認識活動、すなわち、知性認識が知性認識を知性認識する活動であるということが示される。

### 引用 3

動かされかつ動かすものは中間なので、動かされないで動かすものがあり、それは永遠であり、実体であり、現実態である。〔そのような不動の動者は〕欲求対象や知性認識対象のように動かす。〔つまり〕

アヴィセンナ『治癒の書』における宇宙の発出について（小林）

動かされないで動かす。〔ところで〕これら〔欲求対象と知性認識対象〕の中で第一のものは同一である。なぜなら、欲望の対象は善に見える〔だけの〕ものであるが、意志の第一対象は〔本当に〕善であるものだからである。〔つまり〕我々が欲求するから〔善に〕思われる〔善と認識される〕というよりもむしろ、〔善に〕思われる〔善と認識される〕から我々は欲求するのである。実際、知性認識が〔欲求の〕始まりなのである。ところで、知性は知性認識対象によって動かされるが、〔知性認識対象の〕一方の列はそれ自体で知性認識対象である〔他方の列は他のものによる知性認識対象である〕。その中では実体が第一のもので、実体の中では純一で現実態に即したものが第一である<sup>9)</sup>。

アリストテレスによれば、動くものは必ず他のものに動かされる。というのも、運動変化とは、可能態にしかないものの現実化である。それは現実態との接触によって生じる。しかし可能態にしかないものは、決して現実態にはないのである。

そしてその動かすものもまた動くならば、それもまた他のものに動かされる。これが上記の「動かされかつ動かすもの」である。しかし引用3によれば、この連鎖は無限には続かない。どこかに第一動者、すなわち、動かされないで動かす不動の動者が存在する<sup>10)</sup>。不動の動者は欲求対象、知性認識対象として動かす。アリストテレスはこれを神と呼ぶ<sup>11)</sup>。

引用3でアリストテレスは、欲求対象と知性認識対象の中で第一のものは同一だと語っている。これは一体どういう意味であろうか。この疑問を解くカギは、まず次の文にあるように思われる。すなわちここでは、「欲望の対象は善に見える〔だけの〕ものであるが、意志の第一対象は

---

9) *Aristotle's Metaphysics*, c. 7, 1072a 24-32.

10) アリストテレス『自然学』第7巻第1章、第8巻第5章参照。

11) *Aristotle's Metaphysics*, c. 7, 1072b 29-30.

〔本当に〕善なものである」と語られている。ここでの「善」（カロン）を欲求対象、「欲望」（エピトゥミア）を感覚認識に基づく欲求、意志（プレシス）を知性認識に基づく欲求と理解すれば、本当の欲求対象は知性認識対象でもあるということになる。その場合上記の、欲求対象の中で第一のものとは、本当の欲求対象である知性認識対象ということになるだろう。また、「〔善に〕思われる〔善と認識される〕から我々は欲求する」というのは、次の「知性認識が〔欲求の〕始まり」と同じ意味であろう。

では、知性認識対象の中で第一のものとは一体何のことであろうか。引用3によれば、他のものによるのではなく、それ自体で知性認識対象であるものの中で第一のものは、現実態に在る純一な実体である。ここで語られている「第一」とは、上述のことから類推して言えば、「本当の」という意味であろう。その場合、それ自体で知性認識対象であるものの中で第一のものとは、本当にそれ自体で知性認識対象であるものということになるだろう。

本当にそれ自体で知性認識対象であるものが、現実態に在る純一な実体であるとは、どういう事態であろうか。知性認識対象であるものが、そういうものである限りで現実態に在るということは、この場合の知性認識対象は、ただ単に知性認識され得るという可能態に在るのではなく、すでに現実態において知性認識されているということになるだろう。そのためには、このような知性認識対象は知性認識者に受け取られて現実に知性認識されていなければならないだろう。なおかつこの知性認識対象は純一である。だから、そこでは、知性認識対象と、それを知性認識する活動と、それを行う知性認識者とは純一でなければならないことになるであろう。

だから引用3によれば、本当の欲求対象は、本当にそれ自体で知性認識対象であり、それは現実態に在る純一な実体である。すなわち、純一に知性認識対象でありかつ知性認識活動でありかつ知性認識者である実体である。そしてこれこそが、アリストテレスが神と呼ぶ不動の動者であるように思われる。

以上の通り、アリストテレス『形而上学』第12巻第7章によれば、何か動くものが存在すれば、必ず不動の動者が存在する。それは第一の、つまり本当の欲求対象（善）であり、本当にそれ自体で知性認識対象であり、現実態に在る純一な実体、すなわち、知性認識対象でありかつ知性認識活動でありかつ知性認識者である。これをアリストテレスは神と呼ぶ。この神は、アリストテレスが同じく第9章で語った知性、すなわち、最善であるがゆえに、現実態に在る知性認識活動、つまり、知性認識が知性認識を知性認識する活動であるがゆえに、自身しか知性認識しない者と同じものを指していると思われる。

## 2. アヴィセンナ『治癒の書』「神学的（形而上学）」第9巻第4章

アヴィセンナは彼の『治癒の書』「神学的（形而上学）」第9巻第4章で、どのようにして第一者（神）から諸知性認識、諸天球が発出するかについて、以下のように述べている。

### 引用1

その〔第一者の〕結果それ自身は〔その本質において〕存在可能であるが、第一者において存在必然的である。その〔第一者の結果の〕存在必然性は、それ〔第一者の結果〕が知性認識であるということにおいて在る。そしてこれ〔第一者の結果〕は必然的に、それ自身〔その本質〕を知性認識し、かつ第一者を知性認識する<sup>12)</sup>。

ここで、存在必然性は、知性認識であるということにおいて在ると言われているので、「存在可能的」とは、具体的には、知性認識可能な、知性認識能力であるという意味であろう。それに対して「知性認識である」とは、現実態において知性認識活動であるという意味であろう。

---

12) Avicenna, *The Metaphysics of The Healing*, ed. Michael E. Marumura, Probo, Utah, Brigham Young University Press, 2005, b. 9, c. 4, n. 11, p. 330, ll. 5-6.

そして、知性認識能力が、現実態において知性認識するとは限らないのに対して、現実態における知性認識活動は、必ず知性認識しているから、存在必然的なのだろう。「第一者において存在必然的」の「において」の意味については引用 2 以下で検討する。

引用 2 (引用 1 の続き)

だから、それ〔第一者の結果〕においては、その複数性に属する、〔以下のような三つの知性認識の〕内容がなければならない。すなわち、(1) それ〔第一者の結果〕が、存在可能なそれ自身〔その本質〕によって、それ自身の範囲内で知性認識する内容。(2) それ〔第一者の結果〕が、第一者に属するが、それ〔第一者の結果〕自身〔その本質〕において知性認識可能な、その〔第一者の結果の〕存在必然性によって知性認識する内容。(3) それ〔第一者の結果〕が、第一者によって知性認識する内容<sup>13)</sup>。〔(1)～(3) は訳者〕

この箇所によれば、第一者の結果がする三つの知性認識のうちの一つ目は、存在可能な、すなわち知性認識可能な、知性認識能力である第一者の結果自身・その本質を知性認識することである。二つ目は、第一者の結果の存在必然性、すなわち、その現実態における知性認識活動を知性認識することである。

ただしこの存在必然性、現実態における知性認識活動は、第一者に属するが、あくまでも第一者の結果自身・その本質において知性認識可能な限りでのものである。この「に属する」(ミン)は、引用 1 で語られた「第一者において存在必然的」の「において」(ビ)と、基本的に同じことを指していると思われる。だから、この「において」には「に与って」といったニュアンスがあるように思われる。

---

13) *The Metaphysics of The Healing*, b. 9, c. 4, n. 11, p. 330, ll. 6-8.



それに対して三つ目は、第一者そのものを知性認識することである。二つ目と三つ目の違いは何であろうか。第一者の結果が第一者を知性認識するならば、少なくとも第一者は第一者の結果の知性認識対象なはずである。しかしそれは上記の通り、第一者に属するが、第一者の結果自身・その本質において知性認識可能な限りでの、第一者の結果の存在必然性・現実態における知性認識活動とは区別されている。だから、三つ目の知性認識において知性認識対象である第一者とは、第一者の結果の知性認識能力に限定されない、無限の存在必然性・現実態における知性認識活動であるように思われる。

引用3（引用2の続き）

ただし、これ〔第一者の結果〕による複数性は、第一者に由来するものではない。なぜならそれ〔第一者の結果〕の存在可能性は、それ自身〔その本質〕におけるそれ〔第一者の結果〕による何かであり、第一者が原因のものではないからである。むしろ、第一者に属しつつそれ〔第一者の結果〕によるのは、その〔第一者の結果〕存在必然性である。そして、それ〔第一者の結果〕が第一者を知性認識し、かつそれ自身〔その本質〕を知性認識するという複数性は、第一者に由来するその〔第一者の結果の〕存在必然性に付随するのである<sup>14)</sup>。

この箇所の冒頭に登場する「これ（第一者の結果）による複数性」とは、引用2の冒頭に登場する「その複数性」と同じであると思われる。「その複数性」とは、引用1に登場する、第一者の結果における存在可能性と存在必然性のことであるように思われる。実際、引用3では二文目以降、存在可能性と存在必然性が話題とされているのである。

引用3によれば、第一者の結果の存在可能性はそれ自身によるもので

---

14) *The Metaphysics of The Healing*, b. 9, c. 4, n. 11, p. 330, ll. 8-10.

あり、第一者が原因ではない。存在可能性と存在必然性から生じると引用 1、2 で語られていた、第一原因の結果における知性認識の内容の複数性は、この存在可能性たる知性認識能力と共に、存在必然性たる現実態における知性認識活動に付随するのである。

引用 4 (引用 3 の続き)

我々は、一つのものから一つの同じもの〔本質〕が在り、さらにその後、その存在が第一のもの〔一つ目の一つのもの〕のうちにな  
い、〔すなわち〕その固有性の原理に属さない付加的複数性が続くとい  
うことを否定しない。むしろ、この一つのもの〔一つ目の一つのもの〕  
から〔それとは別の〕或る一つのもの〔二つ目の一つのもの〕が  
伴い、さらにこの一つのもの〔二つ目の一つのもの〕に何らかの規則  
性、状態、固有性、結果が伴うが、これ〔二つ目の一つのもの〕もま  
た〔一つ目の一つのものと同様〕一つだというのはあり得ることであ  
る。そしてさらにこれ〔二つ目の一つのもの〕から、〔それとは別の〕  
或るもの〔三つ目以降のもの〕のこの〔上記のような〕付随が、分有  
において伴う。だから、そのすべてがそれ〔三つ目以降のもの〕自身  
〔その本質〕に伴うところの複数性がそれ〔二つ目の一つのもの〕の  
後に続くのである<sup>15)</sup>。

この箇所は引用 1 から 3 に従えば、以下のように理解すべきであるよ  
うに思われる。すなわち、冒頭の「一つのもの」(一つ目の一つのもの)  
とは第一者のことである。そこから存在する「一つの同じもの」(二つ目  
の一つのもの)とは第一者の結果の存在必然性のことである。

この「一つの同じもの」に「その固有性の原理にも属さない付加的複数  
性が続く」。「その固有性」とは現実態における知性認識活動のことであ

---

15) *The Metaphysics of The Healing*, b. 9, c. 4, n. 11, p. 330, ll. 10-13.

る。その「原理」とは第一者のことである。それに属さない付加的複数性とは、第一者の結果における存在可能性と存在必然性という複数性、また、そこから生じる知性認識の内容の複数性のことである。

「これ（二つ目の一つのもの）もまた（一つ目の一つのものと同様）一つだ」とは次のことを意味するように思われる。すなわち、二つ目の一つのもの、つまり第一者の結果の存在必然性は、存在必然性である限りでは現実態における知性認識活動であり、その限りでは一つである。第一者の結果に複数性が生じるのはあくまでも、知性認識能力たる存在可能性との複数性によるのである。

「これ（二つ目の一つのもの）から、（それとは別の）もの（三つ目以降のもの）のこの（上記のような）付随が、分有において伴う」の「上記のような付随」とは、第一者の結果が第一者に付随するのと似た付随のことを意味しているように思われる。それはすなわち、一つのものから一つと同じものが在るという付随と、それに続く付加的付随のことである。このような付随が第一者の結果の後にも続くということのようである。「分有において」の意味については引用6の後で検討する。

#### 引用5（引用4の続き）

それゆえ、この〔三つ目以降のもの自身、その本質の〕複数性に似たものが、これ〔三つ目以降のもの自身、その本質〕のうちに複数性が在り得る原因であり、それは、第一者の諸結果〔第一者の結果の諸知性認識〕に由来するものでなければならない。もしこの複数性〔第一者の結果の諸知性認識〕がなかったら、それ〔三つ目以降のもの自身、その本質〕に属するのは、ただ一つのもの〔本質〕しか在り得ず、物体がそれ〔三つ目以降のもの自身、その本質〕に由来するということもあり得ないことだろう。しかも、複数性の可能性がそこ〔三つ目以降のもの〕に在るのはただこのような仕方でのみなのである<sup>16)</sup>。

この箇所の理解は一見難解である。まず冒頭の「この複数性に似たもの」が何なのか良く分からない。また「第一者の諸結果」も何を指すのか良く分からない。しかし、これらはいずれも、三つ目以降のものの中に複数性が在り得る原因を指していると思われる。だから、三つ目以降のものの中に複数性が在り得る原因が何なのかが分かれば、これらが一体何を指しているのか明らかになるように思われる。これについては次の引用6で検討する。そうすればさらに、引用5の「もしこの複数性がなければ」の「この複数性」が何を指すかも明らかになるであろう。

引用6 (引用5の続き)

以上のことから次のことは私たちにすでに明らかである。すなわち、離在的知性認識は数において多数である。だから、諸存在者は第一者に同時に由来するのではない。そうではなく、次のようであればならない。すなわち、それら〔諸存在者〕の中で最高のものが、それ〔第一者〕に由来する第一存在者である。そしてそれに知性認識が次々と続く。かつ、あらゆる知性認識の下に天球が、その質料と、その魂たるその形相とのうちに在り、また、その〔あらゆる知性認識の〕下に知性認識が在る。それゆえ、あらゆる知性認識の下に、存在において三つのものが在る。したがって、創造において第一知性認識に由来するこの三つのものの存在可能性は、上で述べた三つ組〔第一存在者の知性認識〕のゆえであるのでなければならない。〔このように〕複数の領域で、最善のものが最善のものに続くのである<sup>17)</sup>。

「それら（諸存在者）の中で最高のもの」「第一存在者」とは、今までの引用の中で使われていた用語で言えば、第一者の結果のことであると思われる。なぜなら第一者の結果は第一者に由来するとされているからで

---

16) *The Metaphysics of The Healing*, b. 9, c. 4, n. 11, p. 330, ll. 14-16.

17) *The Metaphysics of The Healing*, b. 9, c. 4, n. 12, p. 330, l. 17 - p. 331, l. 2.

ある。そして、その後には次々と続く「知性認識」とは、引用 4, 5 で「三つ目以降のもの」と名付けたものことであるように思われる。冒頭で、多数であるとされている「離存的知性認識」とは、第一者の結果と三つ目以降のもの両方を指していると思われる。

その「あらゆる知性認識の下に、存在において三つのものが在る」というその三つのものとは、より下位の知性認識、天球の形相・魂、天球の質料の三つのことであると思われる。そしてこの三つのものの存在可能性は、「第一知性認識に由来し」「上で述べた三つ組のゆえである」とされている。

ここで「第一知性認識」とは、第一者の結果のことであろう。というのも、引用 3 で見た通り、存在可能性は第一者には由来しない。だからこの「第一知性認識」が第一者であるとは考えられないのである。それゆえ「三つ組」は、引用 2 で語られているような、第一者の結果における三つの知性認識を指しているように思われる。実際「三つ組」とは三にして一なるものことであり、「三つのもの」とは異なるはずである。

以上の理解が正しいならば、引用 5 の理解も容易となるように思われる。すなわち、「第一者の諸結果」とは、第一者の結果における三つの自己認識を指しているように思われる。だから「この複数性に似たもの」も、第一者の結果の三つの知性認識か、あるいは、その原因であるところの、第一者の結果における存在可能性と存在必然性のことを指しているように思われる。

また「もしこの複数性がなければ」の「この複数性」も、第一者の結果における存在可能性と存在必然性の複数性、あるいはそれを原因とする知性認識の複数性のことを指しているように思われる。なぜなら、引用 6 によれば、この複数性が、第一者の結果より下位の知性認識に複数性が在り得る原因だからである。

そしてまたこれらのことから、引用 4 で語られた「分有において」という言葉の意味を推測することも可能であるように思われる。すなわち、

第一者の結果より下位の知性認識に伴う複数性は、第一者の結果の複数性を原因とし、これと似たものであるがゆえに、前者は後者を分有していると考えられているのであろう。

続く箇所ではアヴィセンナは具体的に、第一者の結果における三つの各知性認識から何が伴うかについて語っている。

引用 7 (引用 6 の続き)

だから、(1) [第一知性認識が] 第一者を知性認識することにおいて、第一知性認識から、その [第一知性認識の] 下に在る知性認識の存在が伴う。また (2) [第一知性認識が] それ自身を知性認識することにおいて、最外天球の形相の存在、すなわちその完全性、つまり魂 [が伴う]。また (3) それ [第一知性認識] がそれ自身によって知性認識することに組み込まれた、それ [第一知性認識] に存在が生じる可能性の自然本性において、最外天球の、その種における最外天球の本質全体に組み込まれた物体性の存在 [が伴う]。これ [物体性の存在] は可能態を分有するものである。(1) それゆえ [第一知性認識が] 第一者を知性認識する限りで、それ [第一知性認識] から、[それとは別に] 或る知性認識が伴い、かつ (2・3) [第一知性認識が] 或る観点でそれ [第一知性認識] 自身に関心を向ける限りで、それ [第一知性認識] から、第一複数性が、その [第一知性認識の] 部分的なものにおいて伴う。部分的なものとはつまり質料と形相のことである。あるいは、形相を媒介とした、それ [形相] を分有することにおける質料である。それはちょうど、その [第一知性認識の] 存在の可能性が、その天球 [最外天球] の形相に対応する現実態において現実化しているのと同様である<sup>18)</sup>。[(1)~(3) は訳者]

---

18) *The Metaphysics of The Healing*, b. 9, c. 4, n. 12, p. 331, ll. 2-8.

ここで「第一知性認識」とは、今までの用語で言えば、第一者の結果のことであると思われる。この箇所によれば、これが（1）第一者を知性認識することにおいて、下位の知性認識が伴う。また（2）自身を知性認識することにおいて、最外天球の形相・魂が伴う。さらに（3）自身の存在可能性によって、可能態を分有する最外天球の物体性の存在、すなわち質料が伴う。これと同様に、より下位の知性認識においても、その自己認識の複数性から、より下位の知性認識や各天球が伴うと考えられているであろう（引用5後半参照）。

以上の通り、『治癒の書』「神学的（形而上学）」のアヴィセンナによれば、第一者は第一者の結果の存在可能性（知性認識能力）の原因ではない。そうではなくむしろ第一者は第一者の結果の存在必然性（現実態における知性認識）の原因である。第一者の結果における存在可能性と存在必然性の複数性には三つの知性認識が属する。そしてそれらから、下位の知性認識、最外天球の形相・魂、質料・物体性が伴う。そして下位の諸知性認識からも同様に、さらに下位の知性認識、各天球の形相・魂、質料・物体性が伴う。これら三つのものが存在する可能性はすべて、第一者の結果における三つの知性認識のゆえである。

### 3. アヴェロエス『「形而上学」ラムダ巻大注解』

アヴェロエスは彼の『「形而上学」ラムダ巻大注解』<sup>19)</sup>で、上記のようなアヴィセンナの立場を次のように理解している。

#### 引用1

彼ら〔アヴィセンナら〕は語る。以下のことは事実明らかである。すなわち、これらの知性認識のうちの或るものが或るものに伴う。それは、結果が原因から〔それとは別のものとして〕、あるいは、原因を

---

19) この「ラムダ巻」は、現代の我々が言うところの第12巻と同じである。

有するものが原因から〔それとは別のものとして〕伴うという意味においてである。また以下のことは受け入れられる。すなわち、第一実体は究極的に一であり、究極的に純一である。そしてこのような一で純一なものから発出し、〔それとは別のものとして〕それに伴うのはただ一つのものだけであり、第一天の動者〔第一実体から発出した一つのもの〕から、〔それとは別のものとして〕第一天自体と、それに伴う〔近接する〕天球の動者〔第一天の魂・形相〕が伴う。だから、〔第一天の動者は〕純一でないのだからなければならない。それゆえ、それ〔第一天の動者〕には、それよりもより先の原因がなければならないのである<sup>20)</sup>。

この箇所によれば、アヴェロエスが理解するアヴィセンナの見解は次の通りであると思われる。すなわち、或る知性認識は他の知性認識の原因である。その中で第一実体は究極的に純一である。これを原因とする結果は一つのものだけである（これに相当する発言はアヴィセンナ『治癒の書』「神学的（形而上学）」第9巻第4章（10）に登場する<sup>21)</sup>）。それに対して第一天の動者は第一天自体とその近接動者の原因でもある。だから第一天の動者は純一でない。この理解は、上述の『治癒の書』「神学的（形而上学）」におけるアヴィセンナの見解と大枠において一致していると思われる。

このように理解されたアヴィセンナの見解をアヴェロエスは次のように批判する。

引用 2（引用 1 の続き）

しかし以上のような発言は誤りをもたらす。つまり、一つの作用者に

---

20) Averroes, *Tafsir ma ba'd at-tabi'at*, ed. Maurice Bouyges, S. J., Beyrouth, Dar el-Machreq, 1973, c. 44, p. 1648, l. 9 - p. 1649, l. 1.

21) *The Metaphysics of The Healing*, b. 9, c. 4, n. 10, p. 330, l. 2.



由来するのは一つの活動であるということになると我々が言うほどの外見も必然性も現実活動もない。在るのはただ、知性認識対象が知性認識者の原因であると我々が言う意味での原因と結果だけである。もしそのようであるならば、それ〔知性認識対象〕自身が知性認識〔活動〕でありかつ知性認識対象であるということにおいて、それ〔知性認識対象〕の様々な類似性が〔他の諸々の知性認識に〕知性認識されるということから、〔知性認識対象が〕様々な存在者の原因であるということは妨げられない。そうであるならば、これらの知性認識はこの〔知性認識対象の〕認識の様々な類似性を認識するのである<sup>22)</sup>。

この箇所によれば、一つの作用者に由来するのは一つの活動だけであるとは限らない。もし知性認識対象が、アリストテレスが『形而上学』第12巻（ラムダ巻）第7、9章で語られる「知性認識の知性認識」のように、それ自体で知性認識活動でもある、つまり、知性認識者と一体で、純一であるとしても、その様々な類似性が他の知性認識によって知性認識されるということから、様々な存在者の原因であって構わない。

しかしこのようなアヴェロエスの主張は、上述の『治癒の書』「神学的（形而上学）」におけるアヴィセンナの見解を必ずしも否定してはいないように思われる。その理由は以下の通りである。確かに引用3によれば、第一者が原因であるのは、第一者の結果の存在必然性（現実態における知性認識）だけである。しかしそこでのポイントは、第一者は第一者の結果の存在可能性の原因ではないということである。第一者が存在必然性を通して、第一者の結果の諸結果の原因であることは否定されていない。実際第一者の結果の三つの知性認識が原因であると言われているのは、下位の諸知性認識に伴う三つのものの存在可能性であって、存在必然性ではないのである。

---

22) *Tafsir ma ba'd at-tabi'at*, c. 44, p. 1649, ll. 1-7.

さらに引用2によれば、第一者の結果は、その本質において知性認識可能な限りで存在必然性を知性認識する。これはまさに知性認識対象の或る類似性を他の知性認識が知性認識していることであると理解することは可能である。

だから、アヴェロエスによるアヴィセンナ批判はむしろ、上述のアヴィセンナの見解に対して、第一者・第一実体が、一つのもの（存在必然性）の原因であるだけでなく、それを通じて、他の様々な存在者の原因でもあるという見解を付け加えていると理解する方が良いように思われる。

#### 4. ま と め

アリストテレスによれば、神は知性認識が知性認識を知性認識するようにして現実態に在る知性認識活動である。アヴィセンナ『治癒の書』によれば、このような第一者（神）は、その結果たる知性認識の、存在可能性（知性認識能力）の原因ではなく、存在必然性（現実態における知性認識）の原因である。この知性認識には三つの知性認識が属する。そしてそれらから、下位の知性認識、最外天球の形相、質料が伴う。そして下位の諸知性認識からも同様に、さらに下位の知性認識、各天球の形相、質料が伴う。これら三つのもが存在する可能性はすべて、第一者の結果たる知性認識における三つの知性認識のゆえである。またアヴェロエス『「形而上学」ラムダ巻注解』に従ってアヴィセンナを解釈すれば、第一者は、その結果たる知性認識の原因であるだけでなく、その存在必然性（現実態における知性認識）を通して他の諸存在者の原因でもあると考えることができるのである。

付記 本研究は JSPS 科研費 JP19H01204 の助成を受けたものです。